
白い空間のその中で

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い空間のその中で

【Zコード】

Z3644F

【作者名】

イラル

【あらすじ】

病院の看護婦であるケシは、一つの悩みがあった。それは、同じ病院に勤める一人の医師に、毎回呼び出されることだ。彼の仕事は毎回変なものばかり。今回だつてきつと…。

いつも通りの朝がきた。

白い壁が見るところ見ると視界を遮る。

白と言つても多少灰色がかつていて汚れてはいるけれど。
おはようございます。という挨拶が行き交い、頭を下げたり、
顔をのぞき込んだりしている様がちらほらと視界に入つた。
またか。そう思つたのは、視界に入った私への伝言の紙きれ。
『待つ。』それだけ書かれた紙が黒板の私の名札の上に張られてい
た。

これは出席だと言うのに。なぜあの人はわからないのだろうか。
私はその紙をむしり取つて丸め、ゴミ箱へと放り込んだ。
きつとまた厄介ごとだ。この先生の患者はいつも尋常ではないのだ
から。

それでも私は一つの白い扉の前で立ち止まつっていた。
何も無視をしなくても、嫌だと言えばいいのだ。
だから私はノックをする。

返事はない。

いないはずはないのだが……。

しかたなしにドアノブに手をかけた。
昼間つから病室のドアに鍵なんてかかっているわけがなく、すんな
り扉は私を受け入れた。
視界には白いきちんと整えられたベットが左右に三つずつ。計六個
設置されていた。
白い布が揺れる。どうやら窓が開いているらしい。
人の気配はまったくもつてしないのが不気味だつたが、私は中に入
り扉を後ろで閉めた。

「……人を呼び出しどいていないんですかね。あの先生は。」

私はため息をつくとまつすぐ窓まで歩いていく。

ひらひらと舞う白い布が気になったのだ。

白い布の動きを片手で止め白い以外の色がついた世界を見た。

「さやつー。」

いきなり黒い陰が私の視界を遮り思わず身を引いた。

その時、反射的に目を閉じていた。

目を開けた時には鮮やかな世界が静かにたたずんでいるだけ。

風が私の頬を撫ぜ世界を揺らす。

さつきのは氣のせい？

窓から身を乗り出して外を見てみるけれど特に変わった様子はない。

小鳥かな……ここ九階だしね。

ガタツ

後ろからこきなり物音がして、私はびくっと身を強ばらせた。

「おはよー。ケシ」

聞き覚えのある声にほつとしたのも束の間、

次の彼の発言で背中に冷たいものが走り、冷や汗が吹き出した。

「カンさんも元気そうですね。」

ぱっと後ろを振り向くと黒髪の見慣れた先生が扉に一番近いベットのところに立っている。

ベットにさつきは誰もいなかつたはずなのに。

私は思わず生睡を飲み込み喉を鳴らした。

ベットには茶色い髪の「ぐく普通な男が寝ながら先生と話してくる。いつたいでつこいつ」となのか？

私が彼を見過でじていたとでもいつのか？

「ケシ。」しからが今回の患者さんだよ。ときおり記憶がないそうですね。

人格障害をおこしてゐるんじゃないかつて。」

先生は笑顔で私に説明してから患者さんに私を説明した。

私は軽く患者さんに会釈をし微笑んでみせる。

氣味が悪いがあくまで患者さんだ。

患者さんの前で嫌そうな顔や辛そうな顔はできない。

それに患者さんが寝てたから私もきっと気づかなかつたんだわ。

「先生ひ。ちよつとお話を。」

笑顔で先生の襟首をひつつかみ室外へ連れ出した。

「どうかした？ケシ。」

あっけらかんとした顔でいる先生。
その顔に少し私は苛つきを覚えた。

「先生。私、もうやりませんからね。」

きつぱりと言い放つが先生の顔はここにこしたまま変わらない。
またしてもその顔に私は苛つきを覚えた。

「ねえ、ケシ。君は俺にそんなこと言えたんだ?」

いきなり先生の目が鋭く私を突き刺した。

背中にひんやり冷たいものが走り汗が吹き出してくる。

そして、しばらくその問いかけが頭の中を何度も駆け巡る。

「……私は、他の人に頼んでくださいって言つてるんです。私だつて他に仕事があるんですから。」

たまらず私は先生から視線を外す。

それでも彼の視線はとても痛かった。

「……やだなあ。ケシだつて知つてるだろ?俺がなんなのか。」

声は笑っていた。けれどその内容は私をおびえさせるのに十分だった。

ぞくりと鳥肌が立つのがわかる。

私に選択の余地はない。

「……早く別の方探してくださいよ。私は今度でもう降りますから。」

「ああ、うん。見つかったならね。はい、資料。」

「そう言つて探しもしないんですよね。」

今回はどうしてあの部屋を病室にしたんですか?」

腕に資料がぽんつと触れたので私は受け取りながら先生に聞いた。

先生の顔がまだ見れなくて資料を凝視する。

またあのへらへらした笑みをしてそうで。

人を脅した直後にそんな顔をするのを見たくもなかつた。

「そういう君もなんだかんだ言つて毎回俺のところに来るよね。断れないって知りながら。

病室は俺の部屋を新たに貰つたから俺の患者用にしただけ。面食らつた顔してないで最初の仕事。」

私は先生の台詞にびっくりして思わず顔をあげ先生の顔を凝視していた。

そんな私に先生は資料と紙一枚を押しつけると病室へと姿を消して行つた。

後に残つたのは口をぽかんと開け状況についていけない私だけだつた。

どうして私は止めたいはずなのにあの先生の台詞にどきつとなつたのかしら。

私は本当は止めたくないの？

そりやあ患者さんの役には立ちたいけれどもあの先生の患者さんは……。

じゃあ、なんで？

……先生の役に立ちたい？

「……やめやめつ。あんな先生の役に立つても患者さんは救えないわ。

よし、決めた。私が患者さんを助けよつー！」

そうときまれば話が早いわ。さつむといの人にはつてしまおつ。

紙に張られている顔写真をちらりと身、ホールへと急いだ。紙には写真とホールで待つているとしか書かれていな。

あの先生は本当に字を書くのもおづくうなのね。

ぶつぶつと先生の文句を言つてたら後ろから肩を叩かれた。

「あ、は、はい。何か？」

少しどもつてしまつたが、平静を装つよに笑顔で振り向いた。
振り向いた先には、先生から貰つた写真に移つっていた顔があつた。
写真よりは少々頬がこけ、やつれ氣味ではあるが彼女は間違いなく
写真の人物だつた。

肩まで伸ばした黒髪。多少刻まれている皺からみて、40代後半く
らいの女性だろう。
この人があの患者さんに関係のある人なのだろうか……。

「あの…… よろしくお願ひします。」

私と田が合つと、彼女はいきなり深くお辞儀をした。
私はびっくりして慌ててこちらへ。と同じよつてお辞儀をした。
それから彼女と椅子に腰をかけた。

「私はケシと言います。黒那くろな先生の患者さんのお話ですね？」

とりあえず、話を聞かないことにはどうにもならない。
だって、私はまったく何も先生から聞かされていないのだから。
彼女は小さくコクリと頷いた。

「あの……お名前はお伺いしません。けれど、今回の内容について、
私。

何も先生から聞いてないんです。よろしければ、何故貴方が。

いえ、患者さんが黒那先生の元に居るのか教えていただけませんか
？」

言葉を選びつつ、丁寧に聞く。先生の患者さんだ。

わけありに決まってる。決して名前や素性を聞いてはいけない。

それがあの先生の患者さん関係のルールなのだ。

私の呼び名だって、先生の呼び名だって本当はまったく別のもの。だから、先生の患者さんに会つ時は、胸の名前が入つたプレートは外している。

「はい。私も患者さんと言われている人がなぜ先生のところに居るのかは知りません。

ただ、ただ先生は……。」

そこで彼女は大きく息を吸つた。カタカタと握つていてる手が震えだす。

それを落ち着かせるように彼女は眼を硬く閉じた。

私はもう一度彼女の口が開くのを待つた。

しばらくして、彼女はゆっくりと目を開け、言葉を紡ぐ。

「私の子供を……子供の行方を知つていてる。

あの男が関わっているのだと。そう……おっしゃったのです。」

だんだんと言葉に力が入つてくるのがわかつた。

私は、ただ『そうですか。』と相槌だけを彼女に打つた。そして考えていた。

子供。最近何か事件があつただろうか?しかも、新聞の隅の方の小さな事件。

そんな事件に先生はいつも関係している。

けれど……わからない。

仕方が無い。ここはこの女人に聞いてみよう。

答えてくれないかもしれないけど。

「あの……。」

「ケシ。」

彼女に問い合わせようとした時、私の名をあの人へが呼んだ

。一気に喉が詰まりカラカラになる。背中はぞつと寒くなつた。
軟らかい声だが、明らかに深入りしそうになつた私を、先生はたし
なめている。

そう感じた。ゆつくりとしか動かない首を、やつと先生の方へと向
けた。

相変わらずの笑顔だ。

「な、なんでしょうか？先生。」

「その人をあの病室まで連れてきてくれないか？全て、わかつたん
だ。」

満面の笑みで言う先生。何か発見した子供のよつことつても嬉しそ
うな顔。

それゆえに私の怒りは一気に上昇した。

「はい。わかりました。」

やたらぶつきらぼつに、先生にぶつけるような口調で返事をした。
思いつきり蚊帳の外。

人を呼びつけておいて、彼女を病室に案内させるだけの役！？冗談
じゃない。

私は先生の召使いでもなんでもないのよつ！？って叫びたかつたけ
ど、ここは病院内。

しかも、人が大勢いるホールである。

私はこの気持ちをぐつと抑えた。絶対後で全部ぶちまけてやるんだからっ！

とりあえず、彼女の前を歩き、先ほどの部屋へと案内する。先生は準備があるから。と、さつやとどつかへ行ってしまった。部屋まで来ると、私は今朝の出来事を思い出して冒がムカムカしてきた。

また変なことが起こらないだろ？

アレは本当に気のせいだったの？

疑問が駆け巡って、しばらく扉の前に立ち尽くしてしまった。

彼女が不思議そうに私を見る視線で私は覚悟を決め、ドアを叩いた。

「失礼します。」

ドアを開けてからお辞儀をした。そして、おやるおやる顔をあげ室内を見回す。

……いない……。

ベットには誰も居ない。

見間違ひなんかじやないつ。私は何故かとつさに窓に駆け寄った。またカーテンがひらひらと舞つていたのだ。心臓がドクンドクンと波打つて。

今朝の光景とは違うが、太陽に照らし出された色が目に入る。耳には心臓の音だけが響く。目を閉じないようにと見開いて。私は外を凝視した。

「看護婦さん……？」

彼女が私を呼ぶ。けれど、私は微動だにせずに外を眺めている。

……何も、起こらない……？

いまかいまかと待ち構えている気持ちがだんだんと静まつてくる。そんな、朝と同じようなこと起こるわけ無いじゃない。

さつとアレは気のせいなのよ。

そつ言い聞かせても、なかなか身体は動こつとしない。

「ケシ。何をしてるんだ?」

声に驚いて、ぱっと後ろを振り返った。
額からは汗が噴出している。

気持ちが悪い。心臓がバクバクと言っている。
私を呼んだのはもちろんあの先生。

「……か、患者さんは……?」

もう、焦つて「いる」と隠すことなんかできなかつた。
完全にどもつてしまつ。声が上擦つてしまつ。

「ああ、うう。」

そつ言つて、彼はベットを指差した。今朝と同じ、扉に一番近いベット。
いなかつたのに……絶対にいなかつたのに。
そのベットには今朝の男が、静かに眠つていた。
身体が震えるのを必死に堪えた。黙つていよう。じゃなければ私は
あつと……。

「先生……この人が息子と関係があるんですね?」

彼女が先生に近寄つておそるおそる尋ねている。

なんでこの人は不思議に思わないんだろうか?それともまた私の見
間違い……?

「ええ、そうですよ。つかのとこお伺いしますが。
貴方は狼人間というものをご存知ですか？」

「え？」

さらさらと言葉を紡ぐ先生に、彼女は目を丸くして聞き返した。
そりやあそうでしょう。誰が今の時代、狼人間なんて信じるものか。
「狼人間は、満月の夜に獰猛な野獸に変化する血をもつたもの。
と一般には言われています。けれど、狼人間にもいろいろな種類が
いるんですよ。

彼は、黄色を見ると変化してしまっても危険な種類なんです。
先ほども、変化して出て行つたみたいですが。
ほら、口元と手を」覗ください。」

先生は彼女が口を挟めないくらいつらつらと言葉を並べていく。
私も彼女も、先生の言葉通りに彼を見た。

「ひつ。」

彼女が小さく悲鳴をあげる。私も一步後ずさり、壁に背中をぶつけ
た。
血が、彼の手と口には、ありありと血痕がついていたのだ。
飛び散つたように頬にも数箇所赤い斑点がついている。
流石にこれにはびっくりするなという方が無理だ。そして、先生は
続ける。

「どうやら食事をしてきたようです。
動きが素早いので僕が戻つてくる前にベットに戻つたようなんです
けど。

近づかなければいけないのですよ?」

彼女は、ベッドにこるソレをもつと近くで見よつと歩み寄つていた。それを先生は言葉だけで軽く止めるだけ。ああ、こつものことだな。と心ひ思つて、瞼がまゆつと締め付けられた。

「さて、それでは本題に入りましょうか。貴方のお子さんは、行方不明になつたのち玄関に無残な姿になつて戻つておひこた。それでようしいですね?」

「……はい。」

「やじて、お子さんは黄色い鞄をじょつていた。違いますか?」

「はい……やうです。黄色いランドセルを……買つて上げました。」

彼女の目から次々に涙が溢れてくる。
目はキッとベッドにこるソレを憚々しげに睨みつけたまま。

「その鞄は、コムですか?」

先生は、ベットの下から、真つ赤なランドセルを取り出した。
黄色いランドセルではない……といふから黄色が覗いている
が。

「う……。」

私はそのランドセルから視線を外した。わかつてしまつたのだ。

何故その黄色いはずのランドセルが真っ赤なのか。

血だ。

血で真っ赤になってしまっていいのだ。もう、吐き気が込み上げてくる。

必死に喉元を押さえて、私はちらりと彼らを見た。

見る先生。

こんな光景
見たくなんかなし。
そう思っても、
身体が言ふことを
聞かない。

「あまじてお腹が空いた彼は貴方のお子さんを『きみがつべたの
です。」

そう先生は彼女に告げた。

患者さんの手と「ほ」としていた血、黄色いラムセルが赤くなっていた事実。

信じるには十分すぎるほどの証拠、ふと、ベッドのエンドテーブルをさわ

「つ！！！先生！！！」

私は思わず叫んだ。

いない。

ソレが居ないかつたのだ。

いつの間にか消えたソレに私はまたもやぞつと背筋が凍った。

「おやおや。また脱走ですか。」

先生は笑顔のままベットを見た。たつたそれだけの言葉。まるでいつものことだと言わんばかりの態度だ。

「まあ、それじゃあ。捕まえてきましょうかね。ケシ。悪いのだけど、君も探してくれるかな？」

「……わかりました。」

理不尽だと思つたけど、先生にそう言われて私はやつとほつとした。この場から離れられる。

私は返事をし、一礼をすると、彼女も先生も視界に入れないとしてその場を去つた。

吐きたかった。今朝のも見間違いでもなんでもなく、彼を見たのだ。そう思いなおすと、妙に気持ちが悪い。

彼は狼人間で人を襲うのだ。先生ならきっとこういふ。

『世間にバレる前に始末するべきだ。』絶対にそう言つ。先生の患者さんはいつもソレ関係で。"始末"するところを見たことだつてある。

私は蹲つた。思い出して、気が遠のきやうになつたのだ。

「ケシ。もう終わつたけど。これるか?」

しばらく荒く呼吸をしていくと、目の前に足が見えた。そして、あの声。相変わらずやる」とが早い人だ。

……先生だつて、彼と同類なくせして。

どうして……

そりやつて捕まえてくるのだろ？

”始末”できるんだろ？

問い合わせられたことに答えずにただ非情な先生の顔を虚うな目で見ていた。

いつまでだつて若い先生。緑色の目がキラリと光る。

「ケシ……？」

「行きます……。」

不思議そりに私を見る目がうそ臭くて、私は目を逸らしてそりに見えた。

それから立ち上がる。

先生も私も何も言わずにさつきの病室へと足を運んだ。病室には、今度はカーテンの仕切りが設けられていた。手前のカーテンの裏に寝袋がちらりと顔を出している。厚さから何が包まれている。

先生がそれに近寄つて、カーテンを開けた。

顔が見えない。

何故か顔が見えなかつた。

ただ、直感的にアレなのだと。そう感じて唾を呑み込んだ。
ごくんと喉が鳴る。

先生が、カーテンの後ろに居た女人の人。

赤いランドセルを持つている彼女に試験管を渡す。

試験管の中身は透明で、でも泡がふくふくと出でている」とからして
水ではない。

先生は”始末”させようとしているのだ。彼女に。

「貴方が、やらなくてもいいんですよ？」

先生は彼女にそう言ひ。

でも私は知つていて。

先生はもう、彼女に後戻りなんてできないうちに言葉をたくさん投げかけたに違いない。

彼女はそれを受け取ると、小さく首を横に振った。

そして、血走った目で寝袋を見ると、そのまま試験管を近づけた。

試験管の中身がゆっくりと無くなつて行く。

カーテンから覗く彼女の鋭くなつた血走った目。

黒い瞳が、怖いくらいに燃え上がつていて。

彼女の目から憎しみの炎が消えることなんかないんだ。と。

ただ、呆然とその行為を見ていた。

試験管が空になつた。

途端に私は振り向いてドアを開け、外に飛び出た。

出た場所には、配膳台にのつていて出来立てのドリアが置いてあつた。

あつあつのドリアがふつふつとなつていて。

けれど、試験が空になつたとき、私の頭の中も空っぽになつてしまつたのだ。

真っ白で何も考えられはしない。

『ケシ。君は決して逃げられないんだよ。』

壁越しに、先生がそう言った。

そう。逃げられやしない。

血を見て欲情しちゃうなんて。私もまだまだ先生達と同類なのよ。

赤いトマト……血みたいで美味しそう。

私は逃げられやしない。

彼と同類な限り。

私は血といつ鎌に縛られて。

また同じような朝が来る。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3644f/>

白い空間のその中で

2010年10月12日05時33分発行